

第 11 回 (2009 年 12 月 16 日). 「エイズ孤児へのコミュニティ支援と援助の狭間」

Thurman, Tonya Renee, Leslie A. Snider, Neil W Boris, Edward Kalisa, Laetitia Nyirazinyoye, Lisanne Brown
(2008) “Barriers to the community support of orphans and vulnerable youth in Rwanda”

Social Science and Medicine 66:1557-1567.

有本 寛

2009 年 12 月 16 日

1. 課題と方法

- アフリカには 4340 万人の孤児がいると推計されている。また、HIV 感染率の上昇を背景に、親を HIV/AIDS で失う AIDS 孤児が今後も増えると予想されている。そうしたなか、地域コミュニティによる孤児たちのケアが持続的かつ効果的であることが指摘されている。しかしながら、本稿の対象地域であるルワンダでは、いくつかの懸念材料もある。すなわち、1994 年の虐殺によって伝統的な社会構造や信頼関係が破壊されたこと、HIV/AIDS に対する偏見がみられること、コミュニティが必ずしも孤児をケアする責任を感じていないこと、NGO や政府による援助がコミュニティによる支援を損なう可能性があること、である。
- 本稿の課題は、ルワンダの対象地域における孤児の孤立と孤児に対するコミュニティ支援の状況、およびその要因を明らかにすること。
- 本稿では、質的調査（フォーカス・グループ・ディスカッション (FGD)）と定量分析の 2 つの方法を援用している。
- FGD では、(1) 孤児グループ (4 グループ, 32 人)、(2) コミュニティの成人グループ (9 グループ, 61 人)、に対してグループ・インタビューとディスカッションを行っている。FGD では、孤児に対する支援の限界と孤児の孤立 (marginalization) を規定する要因の探索が行われた。
- 定量分析は、(1) 孤児 (832 人)、(2) メンター (171 人) に対する構造化インタビューから得られた情報を統計的に分析することで、孤児が孤立する要因を定量的に明らかにする。分析は孤児 (N=683) を観察単位としたクロスセクションデータを用いた OLS 推計。被説明変数は、孤児が孤立を感じている度合いを表す孤立化指数、説明変数は孤児自身の属性 (年齢, 性別等) やこれら 4 要因を反映した変数。

2. 結果

- 質的調査 (FGD) の結果、孤児の孤立に関わる 4 つの要因が特定された。第 1 は、経済的要因であり、支援者自身も貧困状態にあつて、孤児を支援する余裕がないということである。また、逆に孤児の側も同じような経済状態におかれていない者との関係を築くことの難しさを語っている。第 2 は、孤児の親に対するコミュニティ側の態度であり、虐殺の関係者や HIV/AIDS に対する偏見が孤児の孤立につながっている。第 3 は、孤児自身の態度の問題であり、彼らの問題行動が彼らに対するコミュニティの信頼を損なったり、支援を困難にしている。第 4 は、孤児に対する NGO の支援であり、手厚い支援を受ける孤児への羨望がコミュニティによる支援を阻害している。
- 定量分析の結果、以上の 4 要因が孤児の孤立につながっていることが定量的にも確認された (Table 2)。

親が虐殺で殺されたり、AIDS で死亡した場合には孤児が孤立を感じる度合いが高い。また、NGO による支援を受けた年数が長いほど孤立しやすい。ただし、本人の素行（逮捕歴、妊娠）は孤立化指数とは正の相関があるが、統計的に有意ではない。

- 以上の分析の結果から、筆者らは、(1) コミュニティが必ずしも結束力が高いわけでもなければ、慈悲深いわけでもないこと、(2) 家族歴（親が虐殺や AIDS と関係しているか）が偏見と密接な関係があること、(3) 孤児自身の問題行動が孤立を深めると同時に、コミュニティがこうした行動の更正に関与しなくなっていること、(4) NGO の支援が”lucky orphan syndrome”や”World Vision kids”と呼ばれるような、孤児への羨望とコミュニティによる支援を阻害していること、などを議論している。